

## 第一章：初来店

### ～触れられただけでバレる秘密～

「緊張、してますか？」

それが最初の言葉だった。照明を極限まで落とした、静かな個室。微かに甘いオイルの香りが漂い、室温はやや高めに保たれている。——身体がほぐれやすい状態を自然と作る環境設計だ。

私はタオルだけを胸元までかけられたまま、仰向けでマッサージベッドに寝ていた。背後から聞こえる低い男性の声は、不思議なくらい落ち着いていて、それなのに背筋に鳥肌が立つ。

「初めての方には、問診のあと“気の流れ、だけ触れて確かめさせてもらっています。力はいれませんから、ご安心くださいね」

「は、はい……」

声が震えるのは、初めてマッサージを受けるから。緊張のせい。私は目をぎゅっと瞑り、そう思おうとした。

「完全予約制・プライベート空間・身体の奥をほぐします」一見すると高級なプライベートサロンのようだが、これが世にいう性感マッサージだと私は知っていた。悶々とする気持ちを検索欄に吐き出していた時、インターネットが薦めてくれたお店。パステルカラーを基調としたホームページの、予約ボタンを気付けば押していた。予約日は次回の休日、最短。目的は首から肩周りのコリ解消と打つ。……そういうことにしていた。

本当は、誰かに触れて欲しいという望みがあった。人肌恋しい。いや、誰かの欲望に触れたい。滅茶苦茶にしてほしい。そんな欲望が、ずっとずっと燻っている。一人でするのは面倒で、満足もできない。かといって誰かと関係を持つ気にもなれず、中途半端に溜まったそれが、私の悩みだった。もし、誰かに滅茶苦茶にされたら……。そう考えてしまうほど、自身の欲望がじわじわ滲み出しているのを自覚していた。

「じゃあ、少しだけ触れますね。呼吸はそのまま、ゆっくりで大丈夫です」

ひとり。静かに背中に置かれた手のひら。重さも温度もまるで気配のように自然で、でも確かに他人の手だった。その手がゆっくりと、身体を探る。背中の中央から、上へ。

肩を通り、首筋に触れる。

「……っ……」

触れられた場所から、伝導するように熱を持つ。指先が  
すべるでもなく、圧迫するでもなく、ただ乗っているだけ  
なのに、身体の奥のなにかが、びくびくと反応している。

「肩……首……ふむ。浅い筋層に反応はありますが、  
それ以上に……」

施術ベッドのきしむ音がした。背後——腰あたりに彼の  
気配がして、重みが乗る。私の腰の上に馬乗りになり、ぐ  
っ、と身体が押し当てられる。背中に固い胸板の感触がし  
て、思わず声が漏れた。

「……ひっ」

太ももに手が置かれ、するりと腰骨のラインへ指が上る。

「ここ」

タオル越しに、骨盤の少し内側に触れられる。

### 第三章…口腔マッサージ

「顎の緊張が強いですね」から始まる施術

その日の施術は、ハルキさんの指示で、薄い布ビキニだけの格好で、椅子に腰掛けた状態で始まった。タオルだけよりはマシなのか、けれど、真っ白のビキニは、私のつん♡と立ち上がった乳首も、既に濡れているあそこも隠してはくれなかった。

「今日はお顔まわりのマッサージも入れましょうか」

先生は立ったまま私を見下ろし、一瞬だけ、白い布を押し上げている胸の先端を、まるで舌で舐め上げるようにねつとりと見つめた。

「特に、顎のあたり……おそらく相当、こつてますよ」

「……顎……ですか？」

彼の手が私の顎に触れる。自然と顔が上がり、目が合う。

「はい。ストレスで無意識に噛み締める方も多いです。あと、口の使い方に慣れてない方ほど固い」

口の使い方……？ その言葉に引っかけりを感じたが、それよりも、私はすでに、いつもの淫らな施術に近づく気配に、本能が先に反応していた。ハルキさんは、椅子に座った私の後ろへ立つ。そして、首にそつと手を添え、顎先に触れた。

「少し……口、開けてみてください。おくちの力を抜くように……そう」

私が言われた通りにぽかんと口を開ける。そこへ、彼の人差し指が、すつと触れる。

「顎の奥、ここ……吸筋」というポイントです。

ここの硬さがあると、吸いつく力にムラが出やすい」

「……え……す、吸いつく……っ？」

「ええ。人間として大切な機能ですから」

「じゃあ実際の動きで、確認しましょうか」

私の目の前に突きつけられるように現れる、はち切れそうなハルキさんの下半身の膨らみ。それが何なのかは言われない。だけど、わかってしまう。

「おくち、マッサージしますね。指のかわりに、これを使うだけ。圧が深く入るので、効率がいいんですよ」

「……っ……っ、でも……そ、それって……っ」

「口を開けてくれたのはあなたです。僕はただ、そこに圧を加えてるだけです。無理にしなくていいです。気持ちいいと思ったら……自然と動いてしまうはずですから。」

言うやいなや、ズボンのジッパーが下がる音が響き、硬く熱を持ったものが、私の口に触れる。唇が押し広げられ、舌の上に重さが乗る。むわっ……♡とした雄特有の匂いと熱気——。それだけで、私の太ももが震え出す。気がつく、私は自ら口を大きく開け、彼に奉仕していた。

「ほら、言ったでしょ？ 身体は正直だ」

固く、太いそれが口の中を支配する。大した経験もないのに、本能が雄の喜ばせ方を知っていた。

「ん、くちゅ、くちゅって、いい音……♡唇が柔らかいから、よく密着しますね。ああ、これ——さっきの吸筋がちゃんと動いてきた。ほら、自分でいやらしい音を立てて吸っているの、分かりますか……？」

「……っん、んっ……♡」

ハルキさんに言葉で辱められると、もう止められなかった。辱められると、なぜかますます奥が疼く。唇で包み、舌でなぞり、吸ってしまう。私は彼の腰に手を添えることもできず、ただ頭を固定されたまま、唇で必死に吸い付いた。自分でも知らなかった動きが、まるで訓練された身体のように再現される。

「ふふ、上手ですね……ご褒美にここ、可愛がつてあげますね」

ぐいつ、と腰を口元に押しつけたまま、完全に尖りきった乳首をカリカリ♡といじめられる。布越しの刺激が、ますます思考を鈍らせる。布を挟んで爪の先でカリカリと擦られ、きつく摘み上げられ、最後にピンッ♡と容赦なく弾か